

IPF 急性増悪における PEEP の意義

特発性肺線維症 (Idiopathic pulmonary fibrosis: IPF) は特発性間質性肺炎の一型であり、命に関わる進行性疾患であるとされています。急性増悪は我が国で提唱された概念であり、IPF の経過中に新たな陰影の出現とともに、呼吸不全が急速に進行する病態です。以前の報告では急性増悪の年間発生率は 14.2%、発生時の 3 ヶ月死亡率は 63.8%とされており、重篤な経過を辿ることが多いとされています。

IPF 急性増悪において治療法は確立しておらず、類似した概念である急性呼吸促迫症候群 (Acute respiratory distress syndrome: ARDS) に準じて治療されることが多いのが現状です。近年、ARDS において人工呼吸器を使用して酸素化を評価することが、その後の経過の予測に重要であることが示されました。一方、IPF 急性増悪において、人工呼吸器を使用することがどのくらい酸素化を改善させるか、人工呼吸器使用下での酸素化が ARDS 同様に経過を予測出来るかこれまでに分かっていません。今回、IPF 急性増悪において人工呼吸器使用による酸素化の改善度、人工呼吸器使用下での酸素化が経過の予測に役立つかを検討する研究を計画しています。

2007 年 5 月～2014 年 6 月までに当院で診断された IPF 急性増悪患者さんのうち、人工呼吸器を使用した患者さんの診療情報を収集して解析を行います。この研究では、集計・解析に際して匿名化して情報を取り扱い、対象者の個人情報厳重に保護しています。上記に該当する方で、この研究についてのご質問や研究協力の拒否を希望される方がございましたら、お手数ですが公立陶生病院呼吸器・アレルギー疾患内科医師・鈴木淳 (電話 0561-82-5101) までご連絡いただければ幸いです。

研究協力者: 公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科部長 谷口 博之

研究協力者: 公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科部長 近藤 康博

研究協力者: 公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科医師 鈴木 淳